

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0630 ◆◆◆

21/04/07

## 【 4 月相場、経験則からは「ドル安・円高」有利か 】

先日終了した 3 月相場は、月間変動幅が 4.61 円。これは今年の月間最大変動幅となっただけでなく、昨年 3 月(同 10.52 円)以来の「大相場」だった。そんな久しぶりに活況を呈した 3 月相場を受けた、足もとの 4 月相場は一体どう動くのだろうか。今回の当レターでは恒例となっている経験則を参考にした月間見通しをレポートしてみたい。

### ◎3 月相場は 1 年ぶりの大相場、2 カ月連続大相場への期待も根強い

3 月 3 日付の当レターで、筆者は「3 月相場は一年でもっとも動く」一など指摘した。もちろん、過去の経験則を踏まえてのものだが、実際の相場も前述したように 1 年ぶりとなる、なかなかの変動を記録している。今後の動きが期待される動きだったといえよう。さて、そんな 3 月相場を受けた 4 月相場だが、最初に 1990 年以降昨年まで過去 31 年間の星取表を指摘すると、14 勝 17 敗となっていた。わずかにドル安・円高が優勢ではあるものの互角に近く、大きな特徴と言えるほどではない。

ちなみに、一般的には 3 月は多くの企業で期末にあたるため、リパトリエーションと呼ばれる資金還流の動きから円高に振れやすい反面、4 月は「名実ともに新年度入りすることで、生保や年金など資本筋からの外債投資が活発化。需給的にはドル高・円安有利」一などと考えられている。しかし、前述したように過去の経験則からすると、必ずしもそうとも言えず、むしろ 4 月相場はわずかながら逆のドル安・円高方向に有利であるということは覚えておいて損がないのかもしれない。

方向性では目立った特徴が見いだせなかったドル/円だが、調べてみると、4 月相場には別に重要なポイントが 2 つあることがわかった。順を追って説明すると、うちひとつは「3 月と 4 月の価格変動はおおむね逆方向に動くことが少なくない」こと。とくに 2000 年以降は例外と呼べるケースが稀であることも非常に興味深い。実際に、3 月と 4 月のドル/円の月足を比較してみると全 21 例中 18 例までが的中、それも 2003 年以降 2009 年までは 7 連勝中を記録していたし、その後一度途切れたあと、2014-20 年と現在も再び 7 連勝中だ。

一応参考までに指摘しておくが、先日終了した今年の 3 月相場は、言わずもがなの月足陽線。月末最終日である 31 日に 110.97 円まで上昇したことは記憶に新しい。いずれにしても、先で指摘した経験則からすれば、足もと 4 月相場は 3 月と逆方向の動きが優勢であるため、ドル安・円高方向一の動きに注意が必要であるかもしれない。本稿執筆時、すでに 3 月高値 110.97 円から 1 円を超える下押しが入っている状況だが、ここから月末にかけてさらなる下落にも要注意だろう。また、以前にも何度か報じているように、ここ数年は年明け 1-4 月の価格変動が年間変動の 9 割程度も占めるケースが多く、残りの 8 カ月はレンジ取引。別の言い方をすれば、「ほぼ付け足し」だ。そうした意味も含め、足もと 4 月の変動は非常に重要という気がしている。

一方、そんな 4 月相場の 2 つ目の特徴は「一年間のなかで 1 月に次いで年間の最高値 or 最安値のいずれかをつける公算が大きい」ことになるだろう。参考までに、1 月については 1990 年以降昨年までの 31 年間で 12 回がそのパターンに合致しているが、4 月は同様に 31 年間で 7 回記録。たとえば、2019 年には「1 月に年間安値(104.10 円)」をつけただけでなく、「4 月は年間高値(112.40 円)」を示現していた。また、4 月につける「ドルの高値 or 安値」は単純に年間の最高値もしくは最安値となるだけでなく、それが結果として「歴史に残るヒストリカルレートになる」ケースも少なくないことも、参考意見として一応指摘しておきたい。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

